

はじめに

モダンデザインを実験する—型而工房の活動とその意義	森 仁史	3
---------------------------	------	---

図版

1章 活動開始	9
2章 デザイン活動	14
3章 集合住宅での実験	21
4章 パイプ椅子	23
5章 住宅	25

参考図版	27
------	----

実測図面	28
------	----

文献目録	30
------	----

年表	31
----	----

参考資料 1

工房設立と当時の建築的事情(青春の道標) 松本政雄	32
---------------------------	----

参考資料 2

型而工房の実験椅子 中島賢次	35
----------------	----

参考資料 3

「型而工房」の生い立ち 鈴木太郎	35
------------------	----

凡例

作品図版の表記は次の通り

作者 作品名 材質 サイズ(縦×横×高さ cm) 寄贈者

森 仁史

1. 活動の軌跡

型而工房の活動は三期に分けられる。第一期は昭和3(1928)年5月から12月で構想と模索の段階、第二期は昭和4(1929)年初頭から五年末までで、第一回展から蔵田の渡欧までのデザインの試行期になり、第三期は昭和6(1931)年から12年頃までの日本独自の機能主義デザインの実践と確立期と性格づけられる。

*型而工房同人の変遷

	東京高等工芸学校関係者	その他
第一期 1928	蔵田周忠、松本政雄、鈴木太郎、 豊口克平、森谷猪三男	野口巖、小川光三〔創宇社員〕 吉田
第二期 1930	伊藤幾次郎、豊口克平、中島賢次、 蔵田周忠、松本政雄、小林登、 齋藤史郎	池辺義敦〔昭和2年東京美術学校図案科 卒業〕、 岩井良二・佐藤桂次〔小沢慎太郎商店〕
1931	蔵田周忠、松本政雄、豊口克平、 伊藤幾次郎、中島賢次、小林登、 齋藤史郎、手塚敬三、	岩井良二・佐藤桂次〔小沢慎太郎商店〕
第三期 1936	蔵田周忠、伊藤幾次郎、剣持勇、 小林登、高橋實、手塚敬三、 豊口克平、中島賢次、松本政雄、 剣持勇	

記載は発表時の記録に従った。〔 〕内は所属

昭和3年、東京高等工芸学校工芸図案科を卒業間近にした松本政雄を中心に、デザイン活動を実践する同人組織をつくる構想が同期生の間で語られ、同科講師だった蔵田に相談がもちかけられた。彼らは当時の日本デザイン界がもっとも関心を寄せていたドイツ工作連盟などのヨーロッパにおける量産品デザインを実際にも実践してみようと考え、彼ら自身が目指すデザインを自ら形にしてみようとした。彼らは当初六科工房という仮称を考えたが、これは次のようにメンバーが六つの領域を分担して活動しようと計画したからだった。

木工科—鈴木太郎、豊口克平、森谷猪三男

織工科—野口巖、松本政雄

金工科—蔵田周忠、松本政雄

硝子工科—小川光三

紙工科—豊口克平、小川光三

陶工科—蔵田周忠

昭和3年10月5日の設立の会合で型而工房の名称が決まった。この命名は形而上学と形而下の仕事を結びつけるという意図と工芸という造型活動なのだから型という文字をとったということらしい。この時の会員は大半が東京高等工芸学校の卒業生で、これに加えて恐らく分離派建築会員蔵田の仲介によって創宇社員が参加したのであろう。東京高等工芸学校ではインテリアデザインを扱うのは工芸図案科か木材工芸科かであった。蔵田は工芸

図案科で室内装飾を講じていた。同校周辺では1923年には木材工芸科教授森谷延雄、木檜一が指導した木材工芸学会による標準家具メッセ、工芸図案科教授宮下孝雄のデルタ図案研究所、1924年には工芸彫刻部教授畑正吉を中心にしたx会、とデザインの実験活動が続々と展開されていた。型而工房ともっとも継承関係が深かったのは森谷延雄の主宰した木のめ舎であった。

森谷は1920-22年にヨーロッパに留学し、同地で表現主義の影響を受けた。彼はその後もさらに新たな表現スタイルを追求し、木のめ舎〔挿図1〕では装飾を排しつつ美しい家具を実現しようとした。しかし、森谷はこの木のめ舎の最初の展示会開催を目前にして1927年4月5日に急逝した。型而工房結成時の同人7名のうち鈴木と森谷の2名がこの木のめ舎の経験者であった。また、蔵田は森谷とその作品を生前からよく知っており、新時代を開く家具デザイナーとして注目していた。もちろん、蔵田は分離派建築会時代の表現主義から機能主義へと転換をはかろうしていたから、森谷のし残した仕事をさらに発展させたいと考えたに違いない。だから、森谷の急逝によって活動を中断せざるをえなかった木のめ舎旧同人の思いと、次の世代が目指そうとした思いが森谷の急逝によって急激に結実したと考えればよいのだろう。

1920年に発足した生活改善同盟会が日本人の生活を椅子式を基準とするという提案を示し、2年後に東京を襲った関東大震災とその復興事業はこうした新しい生活様式を普及させるのに大きな役割を演じた。同潤会による不燃構造のアパート〔挿図2〕は日本で初めての本格的な集合住宅であり、新しい住まいの形式を現実のものとした。私鉄沿線に郊外住宅が建ち始め、洋風の応接間や機能的な台所が普及し始めた。型而工房は主体としては新しいデザインの追求を目指し、客観的には1920年代の日本の新しい住まいの転換期における一連の模索に連なるものであった。

指導者の蔵田はドイツの建築デザイン事情に通じ、彼の地での新しいデザイン動向に詳しくあった。建築家たちの関心は震災復興のなかでの新しい住まいのデザインに向かおうとしていた。分離派建築会に続いてアカデミズムを離れて新しい建築を目指して旗揚げたのが創宇社であった。だから、野口、小川という二人の創宇社同人がこの型而工房に加わったというのは理の当然なのであった。

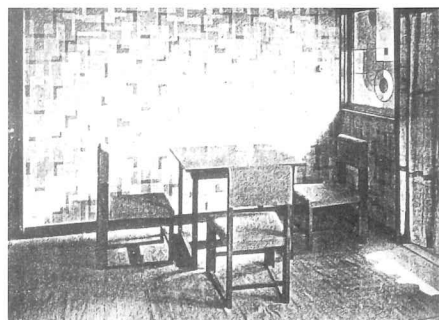
型而工房は結成の1928年、11月28日～12月3日に白木屋呉服店で、12月14～19日に紀伊国屋で試作展を開催した。会場には家具の試作品や図面やスケッチが並べられた。この頃までに、鈴木が退会し、その後松本らと一年前後する卒業生で木材工芸科出身の中島賢次と小林登、齋藤史郎、金属工芸科出身の手塚敬三、東京美術学校図案科卒の池田義教が加わった。また、この頃には創宇社同人は会員ではなくなっていた。この年末に蔵田が設計して竣工した石川邸のパーラーに、同人のデザインによって応接椅子、絨毯、ステンドグラスを制作した。〔挿図3〕翌1929年2月に紀伊国屋で型而工房第一回展を開催したが、こ、1930年に印刷されたパンフレット〔図版1-15〕には機能主義者らしく同人は蔵田を含めイロハ順に表記されている。



1 森谷延雄 《側書架》1927 (松戸市教育委員会蔵)



2 同潤会代官山アパート



3 《石川邸パーラー》

2. メンバー構成と活動展開

同人となった東京高等工芸学校卒業生をまとめたのが次の表であるが、型而工房が昭和2、3年の卒業生を中心に結成され、その後後輩たちと先輩が合流している。志のある卒業生が集まり、いわば学校の課外授業の延長のように活動が展開されたようだ。また、卒業年度はやや離れているが写真部の池田三四郎は殆ど同人に等しい存在であったことを忘れることはできない。具体的な活動は後述するが、池田は親類を通じ蔵田に私淑し、彼の助言で建築写真に志したのも、戦後松本で民芸家具復興に取り組むのもこの時期の活動を抜きにしては考えられないのだ。と同時に、デザイン活動における写真・動画映像の利用という観点からも池田の先駆的活動の意義はいくら強調してもしすぎることはないように思われる。

卒業年次	工芸図案科	木材工芸科	金属工芸科	写真部
1926		小林登〔清水組〕、齋藤史郎〔自営〕		
1927		鈴木太郎〔東京高等工芸学校〕、森谷猪三男〔宮崎〕		
1928	松本政雄〔阿部建築事務所〕、豊口克平〔埼玉県〕、高橋實〔日本電飾〕			
1929		伊藤幾次郎〔加賀屋〕、中島賢次〔清水組〕	手塚敬三〔東京瓦斯電気〕	
1932		剣持勇〔工芸指導所〕		池田三四郎〔自営〕

〔 〕内は1933年の所属

(1)

結成の翌年1929年2月に第一回展〔紀伊国屋〕、30年に第二回展〔不詳〕と二度の展示会を開催し、活動分野がほぼ家具に集中され、専門職人の手も加わって『婦人友』誌上を通じて、角卓子・小椅子・肘掛椅子を標準家具として予約販売した。しばしば自由学園に指導に招かれていた松本を通じて自由学園工芸研究所とは関わりが深かったことによるのだろう。この頃は第一期よりは合理的な生産工程に配慮した家具設計が実行された。また、合理性は設計図のメートル法表記にも現れている。これまでも図面製図は小林が担当したとされているが、今回展示される図面のなかの一枚〔図版1-18〕に小林のサインが認められる。この当時、家具職人たちは和家具と同様にもっぱら尺貫法を用いたが、型而工房は当時の建築界を席卷しつつあった国際建築に連なり、国際基準に倣おうとした。森谷たちの木のめ舎においてさえ図面の表記は尺貫法であった。このことはただ型而工房だけではなく、1930年に結成された工芸集団ビルドに参加した他の工人社、考現学会などに共通した問題関心であっただろうが、実践のレベルとしては型而工房がもっとも進んでいた。

(2)

1929年頃から、蔵田は同潤会代官山アパートの4戸棟(1号館4)に居住

し、日本における先端的な住形式を実地に体験し、豊口も単身者棟に居住(図版3-1)し、池田もここに住んでいた。蔵田の部屋はまさに日本のモダンデザインの黎明の炎が燃え盛るがごとくであった。この年3月13日、蔵田は勇躍ヨーロッパに向けて旅立ったが、その送別会(図版2-4)を池田が撮影した写真には彼らの熱気溢るが撮りおさめられているようである。

1930年3月26日、蔵田はシベリア鉄道を経てベルリンに到着した。この滞在経費は編集同人であった『国際建築』への寄稿によって賄われ、決してぜいぜいな滞在生活ではなかった。到着した3月と12月にバウハウスを訪問し、インターナショナル建築や最新建築を歴訪し(1930年ハンブルク、ウィーン、ブダペスト、フランクフルト、シュツガルト、イタリア、プラハ、31年イギリス、オランダ)、建築デザインの展覧会(1930年グロピウス展・家具メッセ・オーストリア工芸展・ブルノ博覧会・31年バウ・メッセ)や最新動向の紹介にと健筆をふるった。わけでも1930年8月からベルリン市内にあるB.タウトの設計したツェーレンドルフ、次いでオンケルトムズヒュッテのジートルンク(挿図4)に居住することにした。これは渡欧以前に熱望していたのであったが、機能主義デザインを実地に体験してんで無上の意味があっただろう。蔵田は1931年6月に予定を早めて帰国の途に就いた。



4 蔵田撮影 ジートルンク室内から見た庭

(3)

1931年6月に型而工房が主催する「新しき構成」講習会が予告され、ここには水谷武彦、川喜田煉七郎が講師を務めるはずであったが、予告通りには実現されなかった。しかし、これを引き継ぐかのように翌年5月10～14日に型而工房主催の第二回講習会「新しい家具と室内の問題」(図版2-8)が同じ紀伊国屋で催された。この時期に型而工房は帰国した蔵田の新知見を加えて、機能主義的デザインの具体的検討と実践にさらに大きく踏み出した。この頃、池辺、佐藤が同人から去り、豊口と同級の高橋實が加わった。『国際建築』誌上でパイプ家具(手塚敬三・松本政雄)、椅子(小林登・豊口克平・斎藤四郎)、やアパートメントの収納(豊口克平)の問題についての詳細な調査とそれに基づいた具体的提案を発表し、後に『型而工房ラポルト』1、2、3(図版2-22、23、24)として公表した。誌名のラポルトはエスペラント語であり、国際的なユニヴァーサルな立場に立つことを鮮明にしていた。

帰国の年、蔵田は自らの建築事務所を設立し、インターナショナルスタイル建築の実践にふみだした。陸屋根を採用し白いマッチ箱と評される住宅を設計した。蔵田の建築家としての仕事は専ら住宅設計に集中し、キュービクな外観と機能的な室内、家族の暮らし中心の間取りを実現していた。実際、等々力ジートルンク(1936年)をはじめ福沢邸(同年)、白柱居(1937年)(図版5-4)と、蔵田のインターナショナルスタイルの住宅には型而工房の家具は欠かせなかった。蔵田の実践のもうひとつの重要な提案はその工法と概念でも主張された。まず、住宅供給をローコストでスピーディに行うための乾燥工法が採用され、当時実用化された工場で生産された積層材を用いて壁に土壁を採用しなかった。また、「可合成住宅」と命名して家族構成に従って間取りを増減できる設計方式を提案した。(図版5-2) いずれもドイツですでに提唱されていた手法であったが、日本での限られた条件のもとで果敢に課題に取り組もうとした。

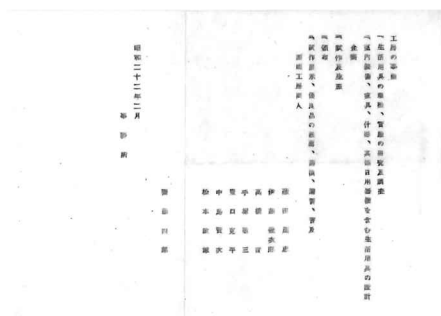
第四回型而工房展は1934年5月22～28日に高島屋で開催された。「新標準住宅室内装備展」と題され、機能主義からさらにル・コルビュジエへの転換を意識させるものであった。台所、応接室、書斎などへの具体的な提案が展示され、製作は同人の伊藤の経営する加賀屋があたった。この内容は翌年に『生産的工業家具』(洪洋社 1935年)として公表された。1936年2月～20日に伊東屋で児童家具展覧会を開き、翌年2月11日～20日に婦人公論標準家具及児童習学家具陳列会と同じく伊東屋で開催された。このタイプの家具は1936、37年に『婦人公論』誌上には同代理部を通じて、椅子・茶卓子・化粧卓子・書棚・整理筆筒・洋服筆筒を標準家具、児童学習家具として販売することが広告されている。しかし、中国大陸で戦火が拡大していくなかで、1938年には活動は休止していたものと思われる。日本はますます戦時体制へとめりこみ、1940年には奢侈品の販売が禁止され、戦時体制が強化された。

戦争が終わり、松本はかつての仲間に呼びかけ、1947年2月に松本、豊口、蔵田、伊藤、高橋、手塚、中島、斎藤の旧同人を中心に「住一建築・工芸研究所」(挿図5)を発足させたが、具体的な活動は不祥である。松本はこの9年後1956年小池新二を団長とする日本で最初のアメリカデザイン使節団の一員として渡米する。時代はモダンデザインの実践が企業活動として必要とされる段階に入ろうとしていた。もはや実験の時代ではなく、利潤をうむデザインが実行される時代に入ろうとしていた。しかし、その後も交友はながく続いたようで、蔵田夫妻の金婚祝賀会にかつての同人が集った写真が残され(挿図6)、彼らの活動が歴史になった時代の流れを語っているようである。

3. 家具作品の位置

工房創設当時の作品は残されていないが、作品図版を見ると、蔵田を含め同人たちはまだ総合主義的な傾向を色濃く残していた。(挿図3)それは彼らだけの独自の傾向なのではなく、日本では1920年代に表現主義の影響を受けた人々はその次に時代の最先端の表現として受容したのが機能主義だったのである。つまり、日本ではほとんどの場合、機能主義者はかつて表現主義者であったのだ。この時代に機能主義を学ぼうとすれば基本的には海外から輸入される文献に依拠するほかはなく、こうした方法によってともかく形態的に機能主義的であろうと努めながら、いまひとつ形の模倣だけに終わっているような印象を与える。あるいは製品にとって十分な耐久性のある構造が完成されていなかった。型而工房でも、従来の常識とされる寸法に対して実践的に正しいサイズ、形態をテストチェア(図版1-8)をつくって、割り出していく作業も必要であった。(資料2)残された写真によって最終的に発表されたものとは異なる試作(図版1-12、13)が行われていることが確かめられ、彼らの試行錯誤をうかがうことができる。

型而工房がデザイン作品として機能主義的な特性を発揮し始めるのは1931年の蔵田の帰国後になってからだろう。これは一方で同潤会アパートといった機能主義を実践する場を想定して数量的な計測(平均な家財の調査、



5 「住一建築・工芸研究所」結成呼びかけ



6 蔵田金婚祝賀会 1971 印画紙 TK

家計調査、収納体積の見積)が行われ、家具としての力学構造的なデザインも洗練されていく。もちろん、蔵田からもたらされたヨーロッパの最新情報とそれからの学習が作品に反映され、機能的な室内のための家具であることと、設計段階から生産合理性を追求することが前提とされるようになる。

よく知られる小椅子と肘掛椅子(図版2-1,2)は櫛の規格材(2×5cm)とベニヤ板を用いるとともに、畳の部屋での使用を考慮して畳ずりを採用した。木曾惣一が『我が家を改良して』(1930年)構想したように、椅子式家具の普及にとっては既存の日本家屋を想定する必要があったのである。また、櫛はこの当時の洋間の施工に広く用いられ、型面工房もこうした手に入りやすい材料に着目したのであった。大正期から、伝統工法で用いる杉松その他の銘木に対し、日本の家屋や家具では一般的でなかったブナ、櫛などのいわゆる雑木の利用は木工業界にとって重要な課題であった。また、座面をクッション入りの布くみとししないで、それまでもスプリング受けなどに使用されていた力裂をクロスして張ることによって部材をそのまま構造する設計とした。これも機能を満たしつつコストダウンを図ろうとする設計意図であった。

こうして、家具の部材の選択によるコスト削減、畳敷きの和室で使える工夫など日本の家屋の現実を考慮した実践が追及された。こうした設計は同時に入手しやすい材料、安価な部材を採用することで量産可能な設計を目指した結果でもあった。1920年代末までにこうした幾つも観点から日本の現状にマッチしたモダンデザインを実践できたことは限られた環境や情報を考慮すれば大いに評価に値するものである。また、これらは1933年以降B、タウトの指導のもとで商工省産業工芸指導所において実施された椅子の規範原型の研究(挿図7)が展開されたが、このメンバーには豊口、剣持が含まれ、彼らが挙げた調査項目は型面工房によってすでに先鞭がつけられており、彼らの先駆性は高く評価されなければならない。

さらにもっとも重要なことは型面工房の設計は機能主義の観点に貫かれ、その理念を体現する点において十分な達成をなしてあげていることと、その造形においてヨーロッパ諸国における幾つもの試行と比較しても決して見劣りしない水準にあることである。むしろ今日の我々の観点からすれば、その簡潔なシルエットは十分魅力的である。ゆるやかな背もたれのカーブやさりげない座面前面の曲面は機能的でありながら造形としての美しさを追求しようとして得られた結論というべきだろう。こうした細部に至る細やかな配慮が型面工房の家具を今なお魅力あふれるものになっているに違いない。彼らのデザインした椅子は全く素材のみによって構成され、それらが形づくるフォルムが簡潔な美をかたちづくるのが追求されている。木材に親しんだ日本の国民性とその体型にマッチした控えめな造形はまさに日本のモダンデザインの傑作と言っていいだろう。機能主義は単に機能的であることだけではなく、機能が美しさを体現してこそ意味ある存在となることを明らかにしているのである。型面工房の仕事はこのことを今も今日の我々に伝えているように感じられている。

(松戸市教育委員会 学芸員)

【文献】

- 『型面工房ラポート』1, 2, 3 型面工房
- 『国際建築』第13巻第4号(昭和12年4月)
- 森仁史編『デザインの揺籃時代展』松戸市教育委員会 1996年
- 松本政雄、中島賢治回想(巻末参照)



7 《標準原型小椅子》(仙台市博物館所蔵)

1章 活動開始

1928年、東京高等工芸学校工芸図案科講師であった蔵田周忠のもとに、教え子だった松本政雄・豊口克平(工芸図案科)、鈴木太郎・森谷猪三男(木材工芸科)らが理想とするデザインを実践しようと集まった。蔵田の援助と指導のもと住宅インテリアをデザインし、同時に自らのデザイン活動を展覧会によって世に問い、アピールした。

彼らの活動は1920年代の芸術全般に機械生産の規則性や合理性に肯定的な主張が表れるのと軌を一にしていた。当時我が国においては、西洋風な近代化が人々の暮らしに浸透し始めていたが、新しい生活様式を単なる模倣ではなく、どうすれば実現できるかは大きな課題であった。

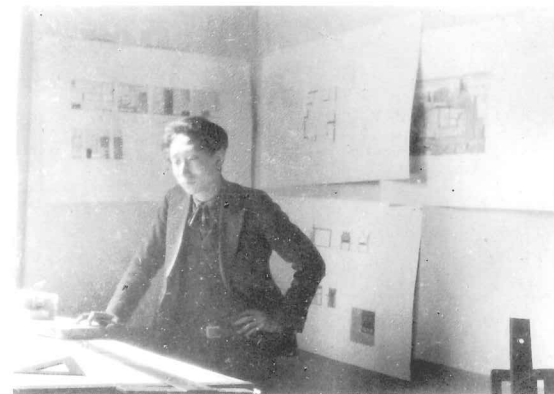


4

- 1— 蔵田周忠ポートレート 印画紙 5.4×7.7 TN
- 2— 教室の豊口克平 1928 印画紙 5.4×7.7 TN
- 3— 工芸図案科生徒 印画紙 TN
- 4— 池田三四郎 東京高等工芸学校写真部校舍 印画紙 14.5×10.9 I



1



2



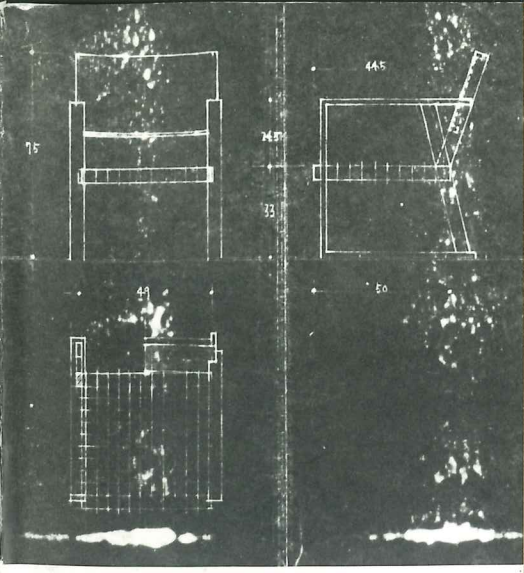
3

結成80周年

モダンデザインの先駆

型而工房展

KEIJI-KOBO 1928-1938



型而工房



主催
松戸市教育委員会・
(財)松戸市文化振興財団

